

AMÉ/AMABAのアスペクト対立に基づく諸解釈について

山村, ひろみ
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/6796330>

出版情報：言語科学. 30, pp.113-139, 1995-02-25. 九州大学言語文化部言語研究会
バージョン：
権利関係：



AMÉ/AMABA のアスペクト対立に基づく諸解釈について

山村 ひろみ

0. はじめに

スペイン語の直説法単純形には過去に言及するものとして pretérito indefinido(あるいは pretérito perfecto simple, なお、これより「愛する」の1人称単数形 amé を以てこの形式の代表形とする), pretérito imperfecto (以下「愛する」の1人称単数形 amaba を以てこの形式の代表形とする) と呼ばれる二つの形式がある。これらの形式の機能的違いに関してはこれまでも様々な説明が試みられてきたが、それらは大きく時制説とアスペクト説に分けられる¹⁾。

時制説と呼ばれるものでは、Lamiquiz(1982:41)の以下の表に見られるように、問題の二形式は直接的な対立を示さない。

表-1 Lamiquiz(1982)における amé と amaba²⁾

época	pasado +	presente φ	futuro —
inactualidad	amara ³⁾	amaba	amaría
actualidad	amé	amo	amaré

Lamiquiz の表中の inactualidad/actualidad は Benveniste の設けた *histoire/discours* の対立に基づくものであるが、スペイン語の動詞体系はフランス語のそれとは異なっているので、Benveniste の枠組みをそのままスペイン語に適用するのは無理がある⁴⁾。しかし、Lamiquizの提案した枠組みはそのままに、それが準拠すべき基準を読み変えることは可能であり、その代表的なものが、Lamiquiz の actualidad を発話時基準の絶対時制とし、inactualidad をある過去時を基準とする相対時制と見做す見方である。これは Belloや Rojo(1974)等によって提唱されてきたものであるが、この見方で重要なのは、両形式が発話時以前の事態に言及することを認めながらも、その機能的違いは話者のその事態の捉え方にあるとする点である。その結果、amaba はある過去時を基準とするが、その機能においては発話時を基準とする現在形の amo と等しくなると見做され、それは amaba がいわゆる「過去の現在」として認識される理由を説明する。一方、amé は発話時を基準としながら、その発話時から見て「以前(あるいは前時的)」に生じた事態を述べる形式と捉えられ、amaba のように「過去の現在」として認識されることはない。換言すれば、amé と amaba はまずそれが準拠すべき基準(発話時か、ある過去時か)、さらに、その基準時に対する時間的關係の二点において異なっており、このことから時制説では amé と amaba が直接の対立を示さないことになるのである。ところで、このような見方は、それまで一般的だった動詞形式の表わす言語外現実を、そのままその形式の体系内の機能と見做す

見方とは大いに異なるもので、動詞形式とそれが表わす言語外現実との関係は認めながらも、その形式の体系内における機能は別途説明されるとする点はこの説の独自性を示すものと思われる。

これに対し、アスペクト説における *amé* と *amaba* は始めから過去時という同一の枠組みに入れられ、その中に設定されたある基準に関して直接対立を示すペアと捉えられる。この見方は Alarcos(1975:125)の以下の表に代表される。

表-2 Alarcos(1975)における *amé* と *amaba*⁵⁾

a	b
amo	amaba
	amé
amaré	amaría
ame	amase, -ra

表-2では表-1と異なり、*amé* と *amaba* が同時に、現在形である *amo* と対立しているのが分かる。Alarcos(1975:124)は上の表の a 欄に属す形式と b 欄に属す形式は *perspectiva* が異なると述べている。この *perspectiva* が具体的に何を意味するかはどこにも記されていないが、その例として挙げられた形式から判断すると a 欄は非過去時、b 欄は過去時を示すものと考えられる。このように考えると、*amé* と *amaba* は両方とも過去時に属し、その意味においてのみ非過去時を示す *amo* と対立していることになる。一方、問題の *amé* と *amaba* については、新たに [±終結性(*término*)]という弁別特徴が導入され、その標示をめぐる対立と見做されている。そして、Alarcos はまさにこの対立をアスペクトの対立と呼んでいるのである⁶⁾。これまで提案されてきたアスペクト説の共通項は、この Alarcos のように、*amé* と *amaba* は同じ過去時という時間枠に属すものであるということ、それ故、これら二形式の機能的違いは時間関係的なものとは別のところに求められるべきだという認識にあると考えられる。

さて、*amé* と *amaba* の機能的違いのメカニズムを解明するには、両形式の実態をもれなく説明することのできる合理的で一貫性のある理論的枠組みが必要とされるが、そのためには、これまで提案されてきた時制説とアスペクト説の主張するところを *amé* と *amaba* の実態に照らし合わせ、その結果を改めて検討してみる必要があると思われる⁷⁾。本稿はこのような趣旨に基づき、上記二説のうち、まず、アスペクト説と *amé/amaba* の実態との関係を取り上げる。具体的には、これまで提案されてきた諸アスペクト説を概観しながら、各説がどれだけ *amé/amaba* の実態を反映したものであるか、また、その主張と *amé/amaba* の実態との間に何か問題があるとしたら、それはどのようなものか等を詳細に考察することになるが、それはいわゆるアスペクト説と呼ばれるものの有効性とその限界を明らかにしていくことだろう。

1. Real Academia Española の解釈

まず、スペイン語のいわば規範と見做されている Real Academia Española (以下、RAE と略記する)の記述の中で *amé* と *amaba* がどのように取り扱われているかを見てみたい。西川(1988)の詳細なスペイン語時制研究史によると、この二形式については伝統的にどちらも過去時を示す形式と把握されているものの、その違いについては、その時々に応じて時制説的解説が行なわれたりアスペクト説的解説が行なわれてきたらしい。実際、RAEの最初の文法書(1771)から RAE(1870)までは、*amé* を *pretérito perfecto*, *amaba* を *pretérito imperfecto* と名付けながら⁸⁾、その機能については前者が「ある事が在った、成就した、あるいは起こったということを表わす」あるいは「動詞の意味することが過去であることを示す」、後者が「過去のある時点に関して、現在として動詞の意味を説明する」というふうに時制説に近い形で説明していたのに対し⁹⁾、20世紀になってから出されたRAE(1917)は *amé* の名称を *pretérito indefinido* と変更するだけでなく、両形式の機能の説明も *amé* が「発話時より以前のしかも不定の時点で終了したか終了しないかを示さぬまま動詞の意味する出来事を表わす」および「動詞の意味によって行為の開始を示したり終結を示したりする」、*amaba* が「終了していない過去の行為を示す」というように全体としてアスペクト説に近いものに変更したのである¹⁰⁾。このような状況の中で、RAEがアスペクト(*aspecto*)という用語を用いて両形式の違いを説明したのは RAE(1973)が最初であった。以下の記述を参照されたい。

“ Los diferentes tiempos de la conjugación imprimen por sí mismos, de manera constante, aspecto imperfectivo o perfectivo a toda expresión verbal. Por esto distingue la Gramática los tiempos imperfectos de los tiempos perfectos.” (RAE 1973:462) 下線は筆者。

“ Son imperfectos todos los tiempos simples de la conjugación española, con excepción del pretérito perfecto simple, o sea: *canto*, *cantaba*, *cantaré*, *cantaría*, (...). Son perfectos el pretérito perfecto simple, *canté*, y todos los tiempos compuestos.” (Ibid.)

ここで注目しなければならないのは、アスペクトという範疇が動詞すべての活用に適用されている点である。諸アスペクト説を概観してみると、このアスペクトを動詞体系全体に及ぶ範疇とするのか、単純形だけに及ぶ範疇とするのか、あるいは、*amé/amaba* の間のみ設定できる範疇とするのかについて意見の相違が見られる。この意見の相違そのものがアスペクトという範疇の曖昧さを示しているとも言えるが、いわゆるスペイン語の規範を記述した文法書の中でアスペクトが動詞体系全体に及ぶ範疇と見做されているという事実は後で行なう諸アスペクト説との関連で一つの比較材料となるであろう。

また、RAE(1973)のアスペクトは *perfecto/imperfecto* の二項から成り立っているが、一方が有標で、もう一方が無標というような捉え方はしていない。各アスペクトの説明は以下の通りである。

“ En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin

de la misma. En los perfectos, resalta la delimitación temporal.” (Ibid.)

とはいえ、RAE(1973)は *tiempos absolutos y relativos* という項目を設け、絶対時制と相対時制の説明もしており、*amé/amaba* の説明には以下の引用文に見られるように *absoluto, relativo* という表現も見られるので全体としてはアスペクト説と時制説の両方を取り入れたものと言える。

“ Como (el pretérito imperfecto) es un tiempo relativo, (…). ” (RAE 1973:466)

“(El pretérito perfecto simple) Es un tiempo pasado, absoluto y perfecto.”

(op, cit. :468) 括弧内は筆者の補充。

以上のことから、現在の RAE の *amé/amaba* に対する態度は、この二形式に対する解釈の現状をそのまま反映したものと言えよう。

2. 代表的アスペクト説の紹介と考察

この章では、*amé/amaba* を直接対立と捉えると同時に、その違いを「アスペクト」という用語を使って説明した代表的な説を紹介し、それらが互いにどういう点で意見の相違を見せているのかをまとめてみたい。その際、各説の違いがよく分かるように以下の点を比較すべきポイントとして選んだ。①アスペクト範疇の及ぶ範囲（動詞体系全体かその一部分）、②アスペクトの捉え方、ある弁別特徴を設定した上での二項対立（いわゆる *oposición privativa*）と捉えているのか否か、もし、そのように捉えているのなら、その弁別特徴は何であるか。各説を概観するにあたっては、まず、これら二点につきどのような態度を示しているのかを述べ、さらに、その説に特徴的な点があればそれらを指摘していくことにする。

2.1. Alarcos(1949, 1975)

アスペクトという範疇を駆使しながらスペイン語の動詞体系を分析した代表的なものとして Alarcos(1949)を挙げることができる。この論文ではアスペクトが *aspecto sintagmático* と *aspecto flexional* の二種類に分けられている¹¹⁾。前者は動詞体系全体を範囲としながら単純形と複合形の間に設定されるもので[±delimitativo]を弁別特徴としている。問題の二形式 *amé/amaba* はどちらも単純形で同じ[-delimitativo]を付与されるのでここでは対立を示さない¹²⁾。これに対して、*aspecto flexional* はまさに *amé/amaba* のためだけに設定された非常に局所的なもので[±terminativo]が弁別特徴となっている。この時、有標項は *amé* であるが、この点について Alarcos は次のように述べている。(なお、以下に引用した Alarcos(1975)は Alarcos(1949)の増補版ともいうべき論文であるが、当該部分に関して意見の相違は見られない。)

“ Insistimos en que lo distintivo entre ambos consiste en la indicación, por parte de *canté*, de un término. Si, en efecto, “sin considerar su duración

o momentaneidad” puede decirse *Fernando III fue rey de Castilla y León*, también es posible decir *Fernando III era rey de Castilla y León*. La diferencia de contenido entre ambas oraciones estriba en que en la primera se alude a un término de la sustancia indicada (“ fue rey y al morir se dejó de serlo” frente a “era rey entonces y no importa si dejó o no de serlo”). (Alarcos 1975:125)

“ *Canté*, pues, conforma una sustancia de contenido bien delimitada: la cesación, en un momento dado, de la sustancia del lexema a que se une. Por el contrario, *cantaba* no hace en absoluto referencia a tal cesación: la sustancia del lexema queda en suspenso, con validez indefinida.” (Ibid.:128)

下線は筆者。

しかし、Alarcos の主張するように *amé/amaba* を「終結性」の標示をめぐる二項対立と捉えるには問題がある。なぜなら、Alarcos がその証拠として出した *ser* を用いた場合でさえ以下のような反例が容易に見つかるからである。

- 1) Yo fui fundador del Coro de Cámara de Caracas. 私はカラカス室内合唱団の創設者でした。
- 2) Desde ese momento fueron amigos. その時以来、彼らは友達だった。

Alarcos の解釈に従えば 1) の主語である *yo* は現在 *ser* fundador という属性を持たないことになるが、実際は逆で、*ser* fundador del Coro de ~ という属性は発話時においても有効である。また、2) のように *ser* amigos の停止(*cesación*)を表わすはずの *fueron* amigos に desde ese momento という事態の開始を示す副詞句を付加することができるのは Alarcos の主張と明らかに矛盾する。これらの点については三章で改めて考察するが、Alarcos の[±terminativo]に基づく *amé/amaba* に対する説明が両形式の実態を網羅的に説明するものではないことは示されたと思う。

2.2. Gili Gaya(1961)

Gili Gaya(1961)における *amé/amaba* の違いに対する説明は RAE(1973)とほぼ一致しており、アスペクト説と時制説を併用したものとなっている。そもそも RAE(1973)の当該部分を執筆したのが Gili Gaya なのであるから¹³⁾、これは当然のことと言えようが、Gili Gaya(1961)では、特にRAE(1973)のアスペクト説明の基となったRAE(1917)の *amé/amaba* に対する批判が述べられているので改めて紹介しておきたい。

Gili Gaya は、まず、動詞の意味に基づくアスペクト (aspectos de la acción verbal) と動詞形式に関わるアスペクトを区別する¹⁴⁾。動詞形式に関わるアスペクトは動詞体系全体に及ぶ範疇であり、*amé/amaba* の違いはこの動詞形式におけるアスペクトの違いと解釈されている。すなわち、*amé* は tiempo perfecto であり、*amaba* は tiempo imperfecto ということである。この perfecto/imperfecto についてはRAE(1973)で記述された内容の他に、その説明を補強すべき RAE(1917)に対する批判が加えられている。以下はその RAE(1917)に対する批判部分である。

“ La *Gramática* de la Academia se confunde al incluir entre los tiempos imperfectos el pretérito absoluto *canté*, aunque en una nota (§ 288) hace visible su vacilación diciendo que «este tiempo, como indefinido que es, no define la cualidad de la acción, o mejor, la expresa como acabada y como no acabada», y añade que «como tiempo relativo expresa unas veces el hecho o acción como incipientes, y otras como terminados, según la significación del verbo. Así, cuando digo: *leí tu carta y en seguida hice la recomendación*, expreso que la recomendación fue hecha después de terminar la lectura de la carta; al paso que cuando digo *vio a su hijo y se echó sobre él*, indico que el acto de echarse se verificó al mismo tiempo que el acto de ver, en aquel mismo momento, sin esperar a ver del todo». Hemos citado literalmente y con alguna extensión el texto académico, para hacer ver que en él se confunde la perfección de un acto con su terminación en el tiempo. La acción incipiente puede ser tan perfecta como la terminada.” (Gili Gaya 1961:149) 下線は筆者。

上の引用文にもあるように RAE(1917)は、*amé* は動詞の意味によって終結を意味することとあれば未終結を表わすこともあると記述しているのだが、Gili Gaya はこれを終結と完了の混同と見做している。彼にとって、ある動詞句の意味する事態が完了することと終結することは全く別のことからである。このことは以下の Gili Gayaの主張に明らかであろう。

“ Si digo que *conocí que me engañaba* quiero significar que mi conocimiento llegó a ser completo, acabado, perfecto, lo cual no es obstáculo para que el conocimiento del engaño continuara después y siga continuando ahora mismo, puesto que el verbo *conocer* es imperfectivo.” (Ibid.:149)

“ Con verbos perfectivos, el pretérito absoluto indica la anterioridad de toda acción; con verbos imperfectivos expresa la anterioridad de la perfección, que no es lo mismo que la terminación en el tiempo.(…) El ejemplo que trae en su *Gramática*(§ 626) aclara por completo la cuestión: «Dijo Dios: Sea la luz, y la luz fue», significa que la luz comenzó a tener la existencia completa o perfecta, aunque la luz es y seguirá siendo; su existencia no ha terminado.” (Ibid.:149-150)

上の引用文によれば *amé*の完了アスペクトの機能は動詞の表わす事態の完了を示すことであるが、それが具体的な動詞において具現化される時にはその動詞の意味が問題になり、それが完了的(verbo perfectivo)な時には、その動詞の表わす事態全体の前時性(簡略して言うと、その事態の終結性)を示すことになり、また、それが不完了的(verbo imperfectivo)な時には、その動詞が表わす事態の完了の前時性(換言すれば、その事態の起動性・開始性)を示すことになるという。ここで重要なのは Gili Gaya がその具体的な動詞における実現形とは別個に *amé* の機能を「動詞の意味する事態の完了を表わす」と定めた点であろう。そうすることによって彼は RAE(1917)の動詞の意味に依存した曖昧な説明を、いわば *amé* の実現形に見られる各論として処理することができたのである。

ところで、Gili Gaya の *amaba* に関する説明は次のとおりである。

“ En los tiempos imperfectos, la atención del que habla se fija en el transcurso o continuidad de la acción, sin que le interesen el comienzo o el fin de la misma.” (Ibid.:148-149)

“ La acción pasada que expresamos en pretérito imperfecto nos interesa sólo en su duración, y no en su principio ni en su término. Si digo *llovía sin parar*, no me importa cuándo comenzó la lluvia, ni que haya dejado o no de llover. En cambio *llovió* y *ha llovido* son hechos acabados.” (Ibid.:160)

上記の Gili Gaya の説明によれば、*amaba* は動詞の意味する事態の開始や終結には言及せず専らその継続・経過を述べる形式ということになる。ここで注目すべきは「継続・経過(continuidad, duración・transcurso)」という表現である。これらの語と *amé* の説明に用いられた「完了(perfección)」を比較すると、そこには Alarcos の「終結」対「未終結」のような直接の対立関係が認められないのが分かる。これは Gili Gaya の考える動詞形式のアスペクト(aspectos perfectivo e imperfectivo)が、前述の Alarcos のように、ある弁別特徴を設定しその標示の有無を巡って対立するものではないこと、つまり、*oposición privativa* ではないことを示すものである。

2.3. Bull(1968)

Bull は所与の言語の時制体系を考える上の理論的枠組みとして axes of orientation とそれに対する order を示した vector system を導入する。axes of orientation には PP(point present), RP(retrospective point), AP(anticipated point), RAP(retrospective anticipated point)があり、動詞形式はそれが関与する axis に対して- (前時)、O (同時)、+ (後時) によって示される order 関係を持つ¹⁵⁾。これらのことを踏まえた上で、Bull は *amé/amaba* の両形式に対して同じ E(RPoV) というベクトル表示を与え¹⁶⁾ これら二形式の違いはアスペクトの違いによるものだとしている。以下を参照されたい。

“ The parallelism between perfective-anterior and imperfective-simultaneous is not to be taken as proof that the entire verb system of a complicated language can be explained in terms of either aspect or order. The vector system by itself provides no means of explaining the difference between he sings and he is singing—both are E(PPoV)—or between Spanish supo and sabía, both of which are E(RPoV). These are clearly aspectual differences.”
(Bull 1968:26)

上記の perfective aspect, imperfective aspect 共に動詞体系全体に及ぶものである。perfective と imperfective の違いそのものについては説明されていないが、それらが *amé/amaba* の各形式において実現される際の意味的違いに関しては次のように述べられている。

“ Since every event has a beginning, a middle, and an end, there are three possible order relations between RP and an event: the event may be initiated at RP, imperfect at RP, or terminated at RP. The Retro-imperfect describes the middle, the Retro-perfect the two ends of the event.” (Ibid.:66)

なお、Retro-imperfect は *amaba*, Retro-perfect は *amé* を示す。

上の説明によれば Retro-perfect は事態の開始あるいは終結を示すことになるが、ある動詞の Retro-perfect が開始・終結のどちらを示すかはその動詞の意味の違い、Bullの言葉によれば、その動詞が *cyclic* か *noncyclic* に因る。*cyclic event* を示す動詞とは Bello の *verbos desinentes* に対応するもので、その特徴は以下のとおりである。

“ A person may try to get up or start to get up but he has not gotten up until he is out of bed and standing on the floor. At this juncture the event comes automatically to an end. This automatic termination is the distinguishing attribute of a class of events which Andrés Bello called “desinent” and which the physicist calls “cyclic”. The action in all such events can be interrupted (...)but the event cannot be prolonged beyond its natural termination.” (Ibid.:44)

一方、*noncyclic* な動詞は上記の *automatic termination* を欠いたもので、*dormir* がその代表例として挙げられている。

以上のことをまとめると、問題の動詞が *cyclic event*を表わす時、*amé*はその事態の終結を、また、*noncyclic event*を表わす時にはその事態の開始を表わし、その終結点と開始点のそれぞれが RP と同時的關係になるということになる。これに対して *amaba* はある事態の開始でも終結でもない中間(*middle*)を表わすのであり、その中間状態とでも言えるものが RP と同時的關係を持つ。*perfective* と *imperfective* のこのような見方は何らかの弁別特徴を設定しその標示の有無を問題にするものとは異なるものである。

ところで、*amé/amaba* の違いに対するこのような Bull の説明は、従来行なわれてきたものと大差ないように見える。もちろん動詞の分類によって *amé* の意味の違いを詳しく分析した点は評価されるであろうが、それとて前述の引用文にもある通り Bello も試みたことであり Bull が最初というわけではない。筆者は Bullの特徴はこれとは別のところにあるのではないかと思う。

まず指摘しておきたいのは、Bull の *amé* に対する解釈の揺れである。先にも述べたように *amé* は(RPoV)とベクトル表示され、以下の引用文が示すように *Retrospective point (=RP)*に方向づけられた形式のひとつと解釈されている¹⁷⁾。

“ The forms oriented to RP, the retrospective tenses, are:

vend-í-a-mos
vend-i mos
hab-í-a-mos vend-i-do
hub-i- mos vend-i-do
vend-e-r-í-a-mos
hab-r-í-a-mos vend-i-do

” (Ibid.:36) 下線は筆者。

ところが、同じ *amé* に対して次のような記述も見られるのである。

“ It (Retro-perfect 筆註) is used, on the one hand, for events recalled at PP but not oriented to RP and, on the other, for events which are either initiative or terminative at RP.” (Ibid.:95) 下線は筆者。

これは *amé* の総合的説明を行なった箇所に見られる記述であるが問題は下線部分である。これによると、*amé* の機能のひとつは PP で回想され RP に方向づけられない事態を示すこととなるが、前述のベクトル表示 (RPoV) はこの *amé* の機能を正しく表わすことができない¹⁸⁾。Bull は *amé* のこのような機能を認識していたにも拘らず *amé* のベクトル表示に変更を加えることはしなかった。これは何を意味するのであろうか。

一方、*amaba* については総論として次のように述べている。

“ The Retro-imperfect is the systemic backshift equivalent of the present-imperfect.” (Ibid.:98) 下線は筆者。

“ A single event is recalled at PP but is imperfect at RP. This is the basic function of the Retro-imperfect and an exact duplicate, at RP, of the basic systemic function of the present-imperfect.” (Ibid.) 下線は筆者。

この記述によれば *amaba* は PP で回想され RP で imperfect の事態を示すことになるが、筆者にとってより興味を引くのは下線部分である。つまり、Bull は *amaba* を *amo* すなわち、現在形の backshift と見做しているのである。この記述によって Bull の *amaba* の諸用法に対する説明はより網羅的なものとなるのだが(第三章二節以下を参照。)、この見方そのものは時制説に近いものと思われる。これは Bull が *amé/amaba* の違いは専らアスペクトの対立にあるとしながらも、両形式の具体的説明には他の形式との相関関係を無視することができないと考えていることを示唆したものと言えよう¹⁹⁾。

2.4. Hernández Alonso (1984)

Hernández Alonso(1984)は動詞体系全体に及ぶアスペクトを導入しているが、その違いが最も明確になるのが *amé/amaba* においてであると言う²⁰⁾。彼の提唱するアスペクトは [±cursivo] という弁別特徴の標示の有無を巡って表わされるものであるが、この *cursividad* については次のように説明されている。

“ En realidad la marca distintiva del aspecto es la *cursividad* o *transcurso* de la acción; o sea, la *perspectiva* de la acción en su transcurso frente a la concepción de la acción o proceso como un todo, al margen de su duración o transcurso. Y téngase presente que no es lo mismo *cursividad* que *duración*: aquella es la perspectiva o punto de vista *cursivo*, mientras que la *duración* es el espacio temporal de un proceso.” (Hernández Alonso 1984:367)

簡略して言うならば *cursividad* とはある事態を進行中のものと見做すか、あるいは、

その事態をひとつのまとまった出来事と見做すかの視点の問題である。この「視点」は当然話者の主観的判断に依存したものであり Hernández Alonsoは次のようにも述べている。

“ Es decir, que se trata de una perspectiva que adopta el hablante ante el enunciado: Si se sitúa paralelamente al devenir de ese proceso, será un punto de vista imperfectivo; pero si se aleja de ese proceso, si lo percibe desde su presente o desde la distancia como un hecho cerrado, su perspectiva es perfecta.” (Ibid.:369)

このような弁別特徴[±cursivo]に対して *amé* は無標項、*amaba* は有標項となる。それぞれの形式に対する具体的な説明は以下のとおりである。

“ La diferencia entre una frase como *Aquí vivieron mis abuelos* y *Aquí vivían mis abuelos*, que estudió Guillermo Rojo, no es de base temporal. Ambas indican una acción en el pasado duradera(tiempo y aktionsart). Lo distintivo es la perspectiva de la comunicación. En la primera enfocamos la acción como un todo cerrado, como si rodásemos un plano general o de conjunto con cámara fija (desde un momento posterior a aquél); mientras que en la frase con imperfecto los comunicantes acompañan mentalmente el movimiento o desarrollo del proceso en el pasado; siguiendo con el símil cinematográfico, podríamos compararlo con un *traveling* horizontal de una escena evocada.” (Ibid.:368-369)

上の引用文で名前の上がったRojo(1974)では *amé* が 0-V, *amaba* が (0-V)oV と分析されている。これは前者が発話時点から見て前に起こった事態を、また、後者はある過去の時点あるいは事態と同時の関係にある事態を示したものである。この分析にも明らかなように、Rojo は *amé/amaba* のどちらかが過去の事態を表わさないということを言っているわけではない。彼は *amé/amaba* が過去の事態を表わすということは認めながらも、この二形式の機能的違いを動詞体系の枠組みの中で処理しようとしたに過ぎない。この点を考慮しながら上記の引用文を読み直すと Hernández Alonso の考えは Rojo のものと類似したものであることに気付くであろう。問題は「視点(perspectiva)」をどう位置付けるかにあると思われる。Rojo の提案した先の分析はそれを *origen* と呼ばれる基準点(0によって示される)を出発点としながら前時、後時、同時というベクトル関係の連鎖で表現可能な時間的關係と見做したのに対し、Hernández Alonso は専ら時間的關係には還元されない独自のもの、すなわちアスペクトと呼ばれるものと見做したのである。Hernández Alonso は自分の説と Rojo の説との類似性を指摘されるのを見越したように以下のような指摘をしている。

“ De ninguna manera podemos fundir la perspectiva de aspecto, la imperfectividad de *cantaba*, con la simultaneidad en el pasado.” (Ibid.:370)

しかし、Hernández Alonso が *amé/amaba* の対立を[±cursivo]に基づくものであることを説明するために次のように述べる時、筆者にはやはり Rojo によって記号化された時間的關係に基づく分析との類似性が意識される。また、もしそこに Rojo の示す分析が意識さ

れないとすると、Hernández Alonso の提唱する perspectiva は客観的な記述のできない曖昧模糊としたものと解釈される可能性が出てくると思われる。

“ El imperfecto de indicativo nos traslada al pasado y nos hace revivirlo, describiéndolo paso a paso. Así en *Aquí había un café* rememoramos nuestras vivencias de entonces y las revivimos en su curso. En cambio en *Aquí hubo un café* nuestra perspectiva del entonces es objetiva y fría desde el presente con relación al pasado.” (Ibid.:371)

3. amé, amaba の諸用法とアスペクト説

前章では amé/amaba の違いをアスペクトの違いと解釈する諸説を概観したが、次にこれらの諸説が amé/amaba 両形式の実態をどのように説明しているかを見てみたい。言語考察の方法からすれば、どの説もこれらの形式のあらゆる同じ実態を記述・分析した後それぞれの主張が展開されるに至ったと想像されるのだが、実際は各説が扱う用法やその範囲にばらつきが見られ、それが各説の主張の違いに繋がっているように思える。そこで本章では、両形式のある用法を取り上げ、その同じ用法に対して各説がどのような説明をしているのかを考察し、その有効性を検証してみたい。

3.1. amé の実態

前述の Gili Gaya, Bull の説では、amé は完了アスペクト(perfective aspect, aspecto perfectivo)を持つが、その意味はそれが具現化される動詞の意味によって異なると主張されていた。そこで本節ではまず動詞をその意味特徴によって4つのグループに分け、各グループにおいて amé がどのような意味を表わすのかを探り、その結果をもとにアスペクト各説の主張を比較検討していく。

3.1.1. 動詞の4分類と amé の意味するところ

筆者は動詞をその意味特徴によって分類するにあたり Vendler を参考にした。それは各動詞を state, activity, accomplishment, achievement のどれかに分類していくもので本稿では次の動詞句を各グループの代表形とした²¹⁾。state のグループは saber la noticia, activity は correr muy rápido, accomplishment は escribir una carta, achievement は llegar a la cumbre である。これらの動詞句を amé に活用させ、それが当該動詞句の表わす事態の何を意味するかを考察した。その結果は次のようにまとめられる。

- | | | |
|------------------------------|---|--------|
| 1) María supo la noticia. | ● | (F) |
| マリアはそのニュースを知った。 | I | |
| 2) María corrió muy rápida. | I | ● |
| マリアはとても速く走った。 | | F arb. |
| 3) María escribió una carta. | I | ● |
| マリアは一通の手紙を書いた。 | | F nat. |

- 4) María llegó a la cumbre.

マリアは頂上に到着した。

I, F

上の I は動詞句の表わす事態の開始点を示し、F は終結点を示す。supo la noticia における supo は saberによって表わされる事態の開始を示すのが一般的であり、それを示すために I の位置に ● の印が付けられ、F は括弧付きになっている。state に属する動詞の中で F を示すかどうかについて若干の違いは見られるものの²²⁾、それが amé の形式となる時、その意味する事態の開始を示すという点においてはみな一致する。corrió muy rápida における corrió は correrによって表わされる事態の終結を示すのが一般的であるが、その終結そのものは恣意的なものである。それゆえ F の横には arb. の印が付け加えられている。それに対して、escribió una carta における escribióの終結はその動詞句の表わす事態が本質的に持った性質と言えるものである²³⁾。従って、この動詞の Fには natural を示す nat. が付け加えられている。最後に llegó a la cumbreにおける llegó であるが、このグループに属する動詞の意味する事態は開始点と終結点の間に時間的差が感じられない。例えば、llegar a la cumbre によって表わされる頂上への到達は、それが成就されると同時に終結することになるのである。このことを示すために、llegó a la cumbreを示す図では I と F が並記され、その上に ● の印が付けられている。さて、以上の動詞の4分類に基づいた amé の意味するところと前章で扱ったアスペクト各説の主張を照らし合わせて検討してみよう。まず、Alarcos の amé は[+término]、すなわち終結を示すという主張は state に属す動詞には適応されることが分かる。これらの動詞の amé の形式は一般的に動詞の表わす事態の開始を示すからである。他方、Gili Gaya, Bull の主張、つまり、完了的あるいは cyclic な動詞の amé はその動詞の表わす事態の終結を示し、不完了的あるいは noncyclic な動詞のそれは動詞事態の開始を示すという主張は amé の実態をかなり忠実に表わしているように見える。しかし問題がないわけでもない。Gili Gaya, Bull は動詞そのものを完了と不完了あるいは cyclic と noncyclicに分け amé の機能を考察していたが、この動詞に何らかの項が付加されると完了的動詞が不完了的動詞になったり、また、その逆が起こったりするからである。以下の例を参照されたい。

- 5) María comió mucho.

マリアはたくさん食べた。

I ●
F arb.

- 6) María comió una manzana.

マリアはりんごをひとつ食べた。

I ●
F nat.

- 7) María comió a la una.

マリアは1時に食べた。

● F
I

上の例文では同じ comer の amé 形である comió が用いられているにも拘らず、付加される項の性質によって終結が示されたり開始が示されたりしている。これは予め動詞の意味特徴を一義的に決定し、それに基づき amé の機能を述べることの不十分さを示唆するものであろう。しかし、それでは amé は一体何を表わすのだろうか。すべての動詞あるいは動詞句に適応されうる amé の意味はどういうものなのか。

筆者は上記の例文およびそれを説明した図から次のことが言えるのではないかと思う。つまり、各動詞(句)の amé はその動詞(句)の示す事態が過去において生起したことを表わ

すということである。換言すれば *amé* は過去に何が起こったかを述べる動詞形式であるということであり、これはすべての動詞(句)にあてはまる。他方 *amé* が過去の事態の開始を示すか終結を示すかという問題は、5)~7)の例文で明らかのように、この形式が具現化された動詞(句)の意味特徴に依存しているので予め規定しておく必要はないと思われる。つまり、*amé* はその動詞(句)の示す事態の過去における生起を示すただけ述べておけば開始・終結の問題はその動詞(句)の意味特徴に従って自然に解決されるのである。例えば *saber la noticia* の生起は「そのニュースを知る」という事態が開始された時に初めて真となる。それ故 *supo la noticia* は *saber la noticia* の開始を示すという解釈が一般的なのであり、同様に、*escribir una carta* の生起は「一通の手紙を書く」という事態が終結した時、すなわち一通の手紙を書き終えた時に真と見做されるのであり、その結果 *escribió una carta* は *escribir una carta* の終結を示すということになるのである²⁴⁾。

3.2. *amaba* の実態

amé に比べると *amaba* には多くの異なる用法がある。その中には過去以外の事態に言及するものもあるが、このような *amaba* の用法は過去の事態に言及した *amaba* とは全く別に独立した用法として説明されることもあれば、過去の事態に言及した *amaba* の用法と何らかの形で関係付けられた形で説明されることもある。本節では、この過去の事態に言及しない用法をも含む *amaba* の様々な用法をアスペクト各説がどのように解釈し説明しているかを見ていく。

3.2.1. 動詞の4分類と *amaba* の意味するところ

- 8) *María sabía la noticia.* I● → (F)
 マリアはそのニュースを知っていた。
- 9) *María corría muy rápida.* I → F●
 マリアはとても速く走っていた。
- 10) *María escribía una carta.* I → F●
 マリアは一通の手紙を書いていた。
- 11) *María llegaba a la cumbre.* →I, F●
 マリアは頂上に到着しつつあった。

amaba が意味する内容は上の図の矢印で示された部分である。● は同じ動詞が *amé* の形を取った場合の事態の生起点を示す。stateに属す動詞の *amaba* は動詞の表わす事態が生起した結果生じた状態を示す。つまり *sabía la noticia* は常に *supo la noticia* を含意しているのである。同じことは activity に属す動詞についてもあてはまる。 *corría* の表わす状態そのものは *corrió* によって示される事態の連続と考えられるからである。しかし、state な動詞の *amaba* が動詞(句)事態の結果状態を示すのに対して、activity の動詞の *amaba* にはそのような意味はない。一方、accomplishment と achievementに属す動詞の *amaba* は動詞(句)事態の生起を前提としない。 *escribía una carta* は決して *escribió una carta* を含意せず、*llegaba a la cumbre* も同様のことが言える。また、achievementの動詞の *amaba* はその事態の終結点のみならず開始点をも示すことができず、ただその動詞の表わす事態の準備段階(preliminary stage)を示すだけである。これはこのグループに属す動詞の意味が瞬間的な事態を表わすことに因ると思われる。

さて、以上のことを踏まえて前述の各説の主張するところを検討してみよう。まず、Alarcos の主張であるが、彼は *amaba* を [-término] としていた。上の図を見ると分かるように *amaba* の矢印が F を越えたものはないのでこの主張は妥当と言えるだろう。しかし、だからと言って *amaba* が常に未終結を表わすものではない点には注意すべきである。以下のように現在と過去を比較する文においては *amaba* が使用されることが多いからである。

12) *Antes comía en casa, pero ahora no.* 以前は家で食事をしていたが、今はそうしていない。

Gili Gaya は *amaba* は動詞の表わす事態の開始・終結には関心を払わず専らその継続を示すと主張していた。確かに *amaba* は各動詞事態の開始や終結を示さず、継続を表わしているように見えるが、問題はその継続の性質に相違が見られることである。先にも述べたとおり、state な動詞に見られる *amaba* の継続は動詞(句)の表わす事態が生起した結果としての状態の継続であるが、accomplishment や achievement の継続は動詞(句)の表わす事態が生起するまでのプロセスの継続を示す。この同じ継続という語によって表わされる内容が動詞の意味特徴によって異なる点は特に注意しなければならないと思われる。Bull は *amaba* は動詞の表わす事態の middle が RP と同時的關係にあると述べていた。しかし、この middle がその事態の一部として想定される動詞は accomplishment や activity に限られる。state な動詞はその意味特徴として F が想定されないのが一般的であり、そうすると動詞事態の middle を設定することは難しくなる。また、achievement な動詞もその意味特徴から開始点と終結点の間に middle を設定することはできないだろう。それでは Bull は state な動詞や achievement に属す動詞の *amaba* をどのように説明するのか。彼は *amaba* を imperfect at RP と述べていたが、同時に systemic backshift equivalent of the Present-imperfect とも述べていた。middle の設定が難しい動詞の *amaba* はこの Present-imperfect の backshift という見方で説明がつくかもしれない。しかし、これはアスペクトに基づく説明ではなく時制説に近いものと言える。Hernández Alonso は *amaba* を perspectiva (cursividad) の存在によって説明していた。彼によれば、この cursividad があるために *amaba* は過去の事態に言及しているにも拘らず、あたかもそれが眼前で展開しているかのような印象を与えることになるらしい。筆者はこれこそ *amaba* が過去の現在と呼ばれるひとつの証拠と考えたいが、Hernández Alonso は *amaba* と *amo* の間に機能的類似を認めない。その結果、この cursividad という概念は主観性の強いものとなり、それと *amaba* の実態を直接結びつけて考察することは難しくなる。

3.2.2. 反復・習慣の *amaba*

amaba は以下の例文が示すように、動詞(句)の表わす事態が過去において反復して生起したこと、また、その事態が主語の過去における習慣であったことを意味することができる。この *amaba* の反復・習慣の意味を各アスペクト説はどのように説明しているのかを見てみよう。

13) *María se levantaba a las ocho todos los días.* マリアは毎日8時に起きていた。

Alarcos はこの用法については何も言及していない。確かに、彼の [-término] という規定からは直接反復・習慣という意味は導き出すことができない。Gili Gaya はこの用法に

ついて次のように言及してはいるが解説はない。

“ Con acciones perfectivas, el hecho de enunciarlas en pretérito imperfecto significa que son repetidas, reiteradas, habituales; (...) Si en estos ejemplos sustituimos el imperfecto por otro pretérito (...), se entendería que la acción se produjo una sola vez. ” (Gili Gaya 1961:161)

Bull はこの用法は *amo*, すなわち Present-imperfect の backshift したものと捉えている。以下を参照のこと。

“ A series of events is imperfect at RP. The axis is defined lexically or by context. The distinction between abstract and nonabstract subjects, necessary to classify the functions of the Present imperfect, is irrelevant since an event oriented to RP cannot, by definition, be an axis-free continuum. (Bull 1968:100)

Hernández Alonso もこの用法に言及はしているが、その内容は前述の Gili Gaya と同じものであり、[+cursividad]に基づく解説はない。

3.2.3. 未遂の *amaba*

amé は常に動詞(句)の表わす事態が過去において生起したことを意味するが、*amaba* はその事態の生起ではなくその予定を意味することがある。この *amaba* の用法のことを伝統文法は *imperfecto de conato*(未遂の *imperfecto*)と呼んでいるが、これは動詞の表わす事態の過去における準備段階(*preliminary stage*)を示すものとも考えることができる。以下の例文を参照されたい。

14) *María se casaba el año que viene.* マリアは来年結婚することになっていた。

Alarcos はこの用法を *metáfora temporal* と呼び、次のような例文を挙げて説明している。

“ *Mañana operaba Felipe un cáncer de cuerdas, pero no asistiré.*
 “*Mañana operaba*” ¿ Por qué ? La culpa es del contexto. La no participación del hablante expresada con otros elementos del contexto léxico, impone la no-participación o el alejamiento expresado morfológicamente en *operaba*. ”
 (Alarcos 1975:130)

Alarcos は未遂の *amaba* を文脈に依存したものと考えている。上記の例文については、話者の不参加(*no participación*)が *operaba* という形式を可能にしたという。この解説に従うと未遂の *amaba* は動詞(句)の表わす事態に対する話者の関与の仕方が問題になるが、これは疑問である。なぜなら、この例文は不参加を示す句がなくても非文にはならないからである。また、Alarcos は “ *Esta tarde teníamos clase de geografía, pero el pro-*

fesor está de viaje.”という文を取り上げて、この時 *amaba* が用いられるのは “La no efectividad de la sustancia léxica, el tener clase” に因るとしている。この説明は彼の主張する *amaba* の [-*término*] という特徴に繋がるものと考えられるが、未遂の *amaba* の実態を忠実に反映したものとは思えない。例えば、14) の例文は必ずしもマリアの結婚が不履行になったことを含意してはいないからである。

Gili Gaya は未遂の *amaba* を時制よりもアスペクトが優先された結果と見做す。以下の文を参照されたい。

“ De tal manera se sobrepone el aspecto a la significación temporal, que a veces se emplea el imperfecto para acciones que no se han producido todavía. Es el llamado imperfecto de *conatu*, por referirse a hechos iniciados y no consumados, p.ej.: *Salía cuando llegó una visita*; la salida no había comenzado, era una disposición o intención.” (Gili Gaya 1961:161)

Gili Gaya の言うアスペクトの優先とは具体的には何を意味するのか。先にも述べたとおり、Gili Gaya は *amaba* を動詞(句)の表わす事態の継続を示すものと見做していた。継続の具体的意味は *amaba* が実現される動詞の意味特徴によって異なっているので、*amaba* が動詞(句)の表わす事態の生起以前のプロセスを示す場合は限られていると思われるが、Gili Gaya はその点について何も述べていない。

Bull は未遂の *amaba* を反復・習慣と同じく Present-imperfect の backshift と捉えているようである。以下の引用文を参照のこと。なお、最初の引用文は *amo* の説明である。*amo* と *amaba* の記述が PP, RP を除きほぼ一致している点に注意されたい。

“ A preliminary phase of an event is imperfect at PP. The decision or commitment to perform the event is anterior to but still operative at PP. The tense form indicates that this decision is imperfect at PP even though the event itself is anticipated.” (Bull 1968:81)

“ It is recalled at PP that a preliminary phase of an event was imperfect at RP. The decision or commitment to perform the event was anterior to but still operative at RP. The speaker recalls anticipating the actual event.” (Ibid.:99)

Hernández Alonso は未遂の *amaba* を *amaría* との類似性によって説明しようとする。まず彼は過去形と未来形には同じアスペクト対立を設定できると述べる。以下を参照のこと。

“ Creemos, pues—y no por capricho de simetría o paralelismo—que en los tiempos del futuro está plasmado el aspecto de la misma manera que en los del pasado.” (Hernández Alonso 1984:373)

その後、*amaría* は *amaba* と同じくアスペクトにおいて *cursividad* を有すると言う。

“ Fijadas las diferencias de enfoque entre pasado y futuro, en lo que atañe al aspecto consideramos que *cantaría*, en el futuro, es la forma que señala la duración, el transcurso en la hipótesis del futuro, lo cursivo de la virtualidad o hipótesis, mientras que *cantaré* señala la acción puntual o el hecho virtual como un todo cerrado. ” (Ibid.:374)

さらに以下のように *amaba* と *amaría* の共通性を挙げ、その結果この二形式の間に時間的交差が生じると述べる。

“ En este último (otro grupo de tiempos imperfectivos 筆註) percibimos que al estar margen del límite temporal subjetivo del presente, al no estar enfocados aspectualmente desde la perspectiva del hablante, las intersecciones y cruces en el Tiempo de los dos tiempos imperfectivos son fáciles y frecuentes; y esto es posible gracias a su común carácter imperfectivo, (…).

Ésa es la razón por la que podemos decir *De buena gana me iba mañana a Madrid* (con un verbo de modo imperfectivo) o *Ahora me tomaba yo un coñac*, con noción de futuridad.” (Ibid.:375)

つまり、両形式とも時間的に現在の主観的時間限界の(límite temporal subjetivo del presente)の片隅にあり、また、アスペクト的にも話者の perspectiva から焦点を当てられていないので時間的交差を起こすということなのだが、それが可能になるのは両形式が *carácter imperfectivo* を有するからとする。確かに、Hernández Alonso の設定したアスペクトおよび時制体系に従えば *amaba* と *amaría* は上記のような共通性を持つと判断することが可能であろうが、筆者はいくつかの疑問を感じる。まず、彼の記述によると *amaba/amaría* がペアを為すのと同様に *amé/amaré* がペアを為すことになるがこれは正しいのだろうか。また、*Me iba mañana a Madrid/Me iría mañana a Madrid* は互いに時間的交差が可能ということなのだが、*iba/iría* の間に意味的違いは存在しないのだろうか。

3.2.4. 描写の *amaba*

amaba は以下の例文に見られるように小説の背景描写としてよく用いられる。

- 15) La gente iba de aquí para allá con las maletas en las manos. Un soldado decía adiós a su novia. 人々はスーツケースを手にあちこちに行っていた。ひとりの兵士が恋人に別れを告げていた。

この描写の *amaba* について Alarcos は次のように述べている。

“ Si el autor se hubiese conformado con narrar, sin hacer partícipe de la escena al lector, todo el pasaje se hubiese transpuesto a la perspectiva del pasado, y la actora hubiera quedado también en ese plano de alejamiento: (…). Aparecerían ahora los dos planos aspectuales: *canté* y *cantaba*, “terminación” y “suspensión”. (Alarcos 1975:133)

引用文中の *suspensión* は Alarcos(1975)の文脈では[-término]を示すと考えられる。これは彼が描写の *amaba* を *amaba* の特別な用法とは考えていないことを示すものと思われるが、これまで多くの研究者がこの用法を特殊なものとして解説を試みてきた事実を彼は無視するのだろうか。とはいえ、Alarcos も描写の *amaba* の特殊性に気が付いていないわけではなく、それは次のような発言によって示されている。

“ La correlación aspectual terminativa, que opone el miembro no terminativo *cantaba* al término terminativo *canté*, puede también cesar su vigencia: *Al amanecer, salió el ejército, atravesó la montaña, y poco después establecía con el enemigo(estableció).*” (Alarcos 1949:71)

上記の例文では当然 *amé* の形の出現が予想される箇所で *amaba* が現われている。フランス語ではこのような *amaba* の用法を *imparfait de rupture* と呼ぶらしいが、これはスペイン語でもしばしば見かけられるものである。Alarcos はここではアスペクト対立がその効力を停止したと言っているが、その理由については何も述べていない。上は Alarcos (1949)にあった記述なのだが、Alarcos(1975)には見当らない。その理由が何なのか興味のあるところである。

Gili Gaya は背景描写の *amaba* について以下のように述べている。

“ La acción pasada que expresamos en pretérito imperfecto nos interesa sólo en su duración, y no en su principio ni en su término. (...) ”

Por esta causa el imperfecto da a la acción verbal un aspecto de mayor duración que los demás pretéritos, especialmente con verbos imperfectos, cuya imperfección refuerza. (...) Se emplea en narraciones y descripciones como un pasado de gran amplitud, dentro del cual se sitúan otras acciones pasadas: Era la primavera, la tierra se rejuvenecía... De aquí su valor de co-pretérito o pretériot coexistente, es decir, como presente del pasado, (...). ”
(Gili Gaya 1961:160-161) 下線は筆者。

上の引用文によると、語りにおける *amaba* は、その中で他の行為が展開する広汎な過去を示す。そこから、この形式の共過去(co-pretérito)的価値、つまり、過去の現在としての価値が導き出されるというのだが、これと *amaba* が動詞の示す事態の継続を表わすということは直接関係付けられるのだろうか。ポイントは *un aspecto de mayor duración* と *un pasado de gran amplitud* の間に類似性を認めるか否かであろうが、Gili Gaya はこの二つの間に何らかの関係性を見いだしているように見える。しかし、筆者には描写の *amaba* が常に Gili Gaya の言うように *un pasado de gran amplitud* を示すものとは思えない。確かに、*amaba* が実現される動詞の意味によってはそのような印象を与えるものはあるが、そうでないものがあるのも事実である。例えば、15)の例文に見られる *iba* や *decía* は広汎な過去の事態として意識されるのであろうか。Gili Gaya はこのような時間的広がりを感じさせない描写の *amaba* を次のように説明しようとする。

“ Como se trata de un tiempo relativo, la limitación temporal que pueden señalar otros verbos o expresiones temporales que le acompañan llega a ve-

ces a anular su carácter imperfecto. Así se explica que, en estas circunstancias, la lengua literaria lo use a veces como un pretérito cualquiera, p.ej.: *Al amanecer salió el ejército, atravesó la montaña y poco después establecía contacto con el enemigo.* La relación con *poco después* neutraliza el valor imperfecto de *establecía*. También cabría decir *salía*, y *atravesaba* por las mismas razones.” (Ibid.:161) 下線は筆者。

Gili Gaya は Alarcos が引用したのと同じ例文を使いこの用法を説明しているが、そのポイントは下線部分である。つまり、彼は、時間的広がりをも想定しにくい描写の *amaba* を *amaba* の相対時制性によって解釈しようとするのである。*amaba* は相対時制だから、それと共起する動詞や時間を表わす表現が時間的制限 (*limitación temporal*) を示す場合には、その影響を受け *amaba* の *carácter imperfecto* は無効になると言う。Gili Gaya はスペイン語のすべての動詞形式をアスペクトと時制の二つを併用しながら解釈するので、上記のような説明が可能になると思われるが、筆者にはアスペクトで説明できない例文は時制で説明すればよいといったご都合主義に見えなくもない。*amaba* の相対時制性は *carácter imperfectivo* を失った *amaba* の形式だけではなく、Gili Gaya が *un pasado de gran amplitud* と見做したもののにも適用できるのではなかろうか。

Bull は描写の *amaba* と考えられる用法について以下のように述べている。

“ This is a special category made necessary by the fact that the speaker does not conform to the pattern of *veni, vidi, vici* in recalling a sequence of events. Instead of treating all events as part of an integrated sequence which is recalled at PP but not oriented to RP, the speaker alternates between recollection without orientation to RP and recollection in which some events are oriented to RP.” (Bull 1968:100)

これによれば、話者は過去の一連の出来事を回想する際に、それを RP に方向づけずに回想することもあれば、RP に方向づけて回想することもある。そして、話者が過去の出来事を RP に方向づけて回想した時、*amaba* が用いられるというのである。ここで注意すべきは、Bull は *amo* のいわゆる歴史的現在の用法を次のように説明している点である。

“ The event is actually recalled at PP but is oriented to RP. The axis is desynchronized and established either by an adverb or by surrounding tense used systemically.” (Ibid.:85)

この *amo* の歴史的現在の説明と *amaba* の描写用法の間には共通性が見られる。ここから、Bull は *amaba* の描写用法も *amo* の持つ機能の *backshift* として処理しようとしたのではないと思われる。

Hernández Alonso にとって、描写の *amaba* はその形式が持つ [+cursividad] の機能をもっともよく表わしたものとなる。しかし、以下に挙げた以上の説明はなされていない。

“ Es esa perspectiva de cursividad o transcurso en el pasado lo característico del aspecto imperfectivo de este tiempo; viene a ser algo así como si

el hablante y el oyente regresaran al pasado para revivir el acontecimiento en su curso, en su devenir, y lo manifestaran como tal mediante esa forma.” (Hernández Alonso 1984:368)

“ Por ello el imperfecto es un tiempo muy idóneo para la descripción.” (Ibid.:369)

3.2.4. 丁寧表現の amaba

amaba の用法の中で過去の事態に言及しないものとして丁寧表現の amaba が挙げられる。

16) Quería hablar con usted. あなたとお話したいのですが。

17) ¿ Qué deseaba usted ? 何いたしましょうか。

Alarcos はこの用法についてまったく言及していない。一方、Gili Gaya はこの用法に次のような説明を行なっている。

“ El aspecto de acción verbal inacabada explica también que se use este tiempo en lugar del presente, en el llamado imperfecto de cortesía. Expresiones como ¿ Qué deseaba usted ?; Quería pedirle un favor; Me proponía hablar contigo, se sienten como más amables que con el verbo en presente: (...) Sin embargo, el sentido temporal es presente en uno y otro caso. Enunciamos modestamente nuestra pregunta o nuestro deseo en imperfecto, como algo iniciado cuya consumación o perfección hacemos depender de la voluntad de la persona a quien nos dirigimos.” (Gili Gaya 1968:161) 下線は筆者。

話者が丁寧表現のために amaba を使うのは、その質問や願望が開始されてはいるがそれが完全に成就されるかどうかは相手の意志に依存していることを示すためである、というのが Gili Gaya の説明であるが、これにはいくつかの問題がある。まず、上に挙げられた例文の動詞のうち、desear, querer は state に属す動詞であるから、amaba の形式はその動詞の示す事態が生じたあとの結果状態を示しているはずであり、その事態の成就が完遂していないという主張には賛成できない。しかも、上記の例文の中で相手の意志に依存していると思われる事態は amaba によって示される事態ではなく不定詞によって示されるもののように見える。従って、もし、Gili Gaya の主張が正しければ、Quería hablar con usted. と言う代わりに Hablaba con usted. と言えそうであるが、少なくとも筆者はこのような文に接したことはない。また、この解釈では、丁寧表現の amaba とその代替形である amaría との関係がまったく説明されない。amaba と amaría の密接な関係は丁寧表現のみならず条件文の帰結節においても観察される。従って、筆者はこの二形式をまったく関係のないものと見做す見方には疑問を感じるのである。最後に、amaba のこの用法の説明の時だけ語用論的になるのはなぜなのだろうか²⁵⁾。丁寧表現の amaba は動詞体系の

いは時間的関係以外のものに求められるべきだと考えアスペクトと呼ばれる範疇を設定した諸説を概観してきた。具体的には諸説のうち代表的と思われる Alarcos(1949, 1975), Gili Gaya(1961), Bull(1968), Hernández Alonso(1984)の各説を紹介し、その後、これらの説が *amé/amaba* の実態をどのように解説しているかを考察した。その結果は次のようにまとめられる。

Alarcos(1949, 1975) : Alarcos は *amé/amaba* を[±*término*]を弁別特徴とする *oposición privativa* と見做している。しかし、この解釈は *amé/amaba* の実態をすべて説明できるわけではない。まず、state のグループに属す動詞の *amé* は、その動詞(句)の表わす事態の開始を表わすのが一般的であり終結を示すかどうかは一律には決められない。*amaba* についても同様で、state に属す動詞の *amaba* はその事態の未終結ではなく、その事態が生起した結果の状態を示す。また、achievement のグループに属す動詞(句)については、それが表わす事態の preliminary stage を示し、未終結と同一に扱うことはできない。さらに、*amaba* の諸用法については、反復・習慣の *amaba*、丁寧表現の *amaba* について何の言及もしていない。確かに、これらの用法は Alarcos の解釈では説明しにくいものと思われるが、それだからこそ適切な言及が望まれる。未遂の *amaba* については特定の文脈が必要としているが、筆者の観察によれば必ずしもその必要はない。描写の *amaba* については *amé/amaba* の一般的解釈から説明できると考えているようであるが、それはこの用法の特殊性を見逃すものである。

Gili Gaya(1961) : Gili Gaya は *amé/amaba* をアスペクトと時制の両方で説明する。しかし、両形式の違いについてはアスペクトの違いを強調するように見える。かれの主張するアスペクトは何らかの弁別特徴の標示に基づく *oposición privativa* ではなく、設定されたアスペクトのそれぞれが独自の意味を持つ。彼によれば *amé* は完了アスペクトを持ち、動詞(句)の表わす事態が完了したことを示すという。一方、*amaba* は不完了アスペクトを持ち、動詞(句)の表わす事態の継続を示すとする。この解釈は Alarcos のものよりは実態をうまく説明できる。特に、*amé* が各動詞(句)の表わす事態の完了を表わすとしたことによって、完了アスペクトにおける開始・終結の問題はそれが具現化される動詞(句)の意味に還元されることになった。ただ、*amaba* の継続という機能に関しては、動詞(句)の表わす事態の意味によってその意味するところが異なるのであるが、この点について Gili Gayaは何も述べていない。*amaba* の諸用法についてはどれも何らかの形で説明を試みているが、そこに一貫性があるとは言えない。特に、描写の *amaba*、丁寧表現の *amaba* ではそれが顕著で、前者ではアスペクトに基づく説明と時制に基づく説明が何の原則もなく、ただその都合に応じて使い分けられ、後者では、突然、語用論的解釈が行なわれている。

Bull(1968) : Bull にとって *amé/amaba* の違いは perfective aspect, imperfective aspect の違いである。*amé* は動詞(句)の表わす事態が cyclic か noncyclic に応じて、その事態の開始あるいは終結を表わすことができる。一方、*amaba* は事態の開始・終結の間にある部分 middle を表わす。しかし、この *amaba* の説明は不十分である。例えば、動詞(句)の表わす事態が state に属す時、その事態には開始点は設定されても終結点は設定されることがないのが一般的で、ただ、*amaba* の説明のためだけに無理に開始点と終結点を設定することはできない。*amaba* の諸用法に関しては、他の説に比べて Bull の説明は簡潔で一貫性があると言える。しかし、この Bull の

説明がすべて amaba の持つ “an exact duplicate of the basic systemic function of the Present-imperfect” という機能に基づくものである点には注意すべきである。なぜなら、この説明はアスペクト対立に基づくものというよりは時間関係に基づくものと考えられるからである。

Hernández Alonso(1984) : Hernández Alonsoにとって amé/amaba の違いは[±cursividad]を弁別特徴とする oposición privativa である。cursividad というのは動詞(句)の表わす過去の事態をあたかも眼前で展開するものと見做す perspectiva のことらしいが、この説明は非常に主観的なものに見える。amé はこの対立の無標項であり、それ故この形式によって表わされた過去の事態は事実を述べるだけの冷たい印象を与えろと言う。一方、amaba はこの対立の有標項であり、過去の事態がこの形式によって表わされると話者と聞き手はその過去の事態を再び経験しているような印象を受ける。amaba の諸用法についてはほとんど amaba のcursividad によって説明されるとしているが具体的にどのような形でそれが可能なのかは不明である。未遂の amaba については amaría との機能的類似性が述べられている。

以上のことから、同じアスペクトという用語を用いても、その内容は使用者によって異なることが分かる。また、このアスペクトという範疇は amé/amaba の違いを解釈するために設定されたにも拘らず、両形式の実態をすべてアスペクトで説明することは不可能であることも分かる。むしろ、この二形式の諸用法のうちアスペクトだけで説明することができるものは限られていると考えたほうがよいのかもしれない。上でも述べたように、特に、amaba の諸用法を一貫性を持って説明していたのは Bull(1968)であったが、それが可能になったのは amaba を「現在形の backshift」と見做していたからであり、これはまさに時制説的な説明と言えるからである。

最後に、amé/amaba の違いを考察する際に無視することのできない問題がある点を指摘しておきたい。それは、動詞(句)の表わす事態の中にはこの二形式の一方しか使えないものがあるということである。例えば、よく知られているように時間の表現は amaba しか使えない。

- 19) Cuando llegué a la estación, eran/*fueron las ocho. 私が駅に着いた時、8時でした。

また、次の cuando 節でも amé は使えない²⁶⁾。

- 20) Cuando yo era/*fue niña(pequeña), hubo un terremoto muy fuerte en Madrid.
私が子どもの頃、マドリードで大きな地震がありました。

このように amé/amaba の選択に制限が加えられる例をどのように解釈していくのか。これはアスペクト説を主張する者のみならず、amé/amaba の違いをより妥当な形で説明しようとする者すべてに課せられた課題である。

註

- 1) *amé/amaba* の機能の違いを説明する諸説の中には、アスペクト説と時制説の折衷案とも言えるものもある。Porto Dapena(1989)はその代表的なもので、単文や複文の主文中における違いは[±complexivo]に基づくアスペクト対立で説明し、複文の従文中に見られる違いは[±simultaneidad]に基づく時間対立で説明する。この案では、*amé*は主文で有標、従文で無標、また、*amaba* は主文で無標、従文で有標ということになっており過去の主動詞に従属した節内に出現する *amé* は*amé/amaba* が[±simultaneidad]に関して中和した結果生じたものと解釈されている。(Ibid.:76)しかし、この考え方には幾つかの問題があると思われる。まず、過去の主動詞に従属した節内に出現した *amé* についてだが、当該環境に出現する *amé* と *amaba* の間には実際何の対立も存在しないのだろうか。筆者の調査によると、当該環境に出現する両形式の間には主動詞に対する時間関係において違いが見られた。つまり、*amaba* が主動詞に対して同時的關係を示すのに対し、*amé* は前時的關係を示すのである。Cfr. 山村(1994) Porto Dapena の説にはこのような言語事実が反映されていない。また、当該環境において *amé* が出現する頻度が低い点を考慮すると中和の実現形としてのその資格にも疑問を呈することができるであろう。しかしながら筆者が Porto Dapena の説に対して抱く最大の疑問は、そもそも最小対立を示すとした二形式に対して、異なる出現環境に異なる弁別特徴を設定し、しかも各弁別特徴に対する有標項が異なると主張することが理論的に可能かという点である。

amé/amaba の違いについては、上記折衷案の他にアスペクト説と時制説を併用しつつ説明を行なっているものもある。後述する RAE(1973)がその代表的なものであるが、この場合 *amé* はアスペクト的には完了アスペクトを有すものであり、時制的には発話時基準の絶対時制と解釈されており、一方、*amaba* はアスペクト的には不完了で、時制的には相対時制に属すものと理解されている。出口(1977)ではスペイン語の時制体系を解釈するにあたり、基底時制と表層時制という考えが提案され、*amé* は基底において Past という時制動詞を、また *amaba* は Past(Neut)という時制動詞を有すると主張されている。この出口(1977)の興味深い点は、上述の主張の後で、Past は本質的に完結アスペクトを持っており、Neut は同様に本質的に不完結アスペクトを持つと述べている点で、その結果、単独の時制動詞 Past の表層時制である *amé* は完結アスペクトを、また、*amaba* はその底位にある Neut が上位にある Past の持つ完結アスペクトの効力を停止させ不完結アスペクトを持つとしている。(Ibid.:25) この案では、時制説とアスペクト説が併用されていると言うよりは表裏一体になっていると考えることができるだろう。

- 2) Lamiquiz(1982:41)ではこの表の上部に接続法の形式が同じように体系化され示されているが、本稿では直接関係のある直説法の部分だけを掲載した。
- 3) *amara* は現代スペイン語では接続法過去の機能を持つとされているので、直説法を対象とした表に配置されるのは大いに問題である。しかし、本稿が扱う二形式の考察には直接影響を与えるとは思われないのでそのまま掲載することにした。
- 4) 第一にスペイン語の *amé* は *histoire/discours* の別なく使用されることに注意しなければならない。従って、Benveniste がしたように*amé*をもっぱら *histoire*(Lamiquiz の *inactualidad*) の形式とすることはできない。しかし、だからと言って、*amé* を *discours* に等しい *actualidad* に入れてしまうというのも問題である。何故ならス

ペイン語には *amé* の他に *he amado* という複合形が存在するからである。*he amado* の一般的用法を考慮するならば、*amé* の位置には *he amado* を置く方が適切かもしれない。しかし、Lamiquiz は *he amado* 以下、いわゆる複合完了形は別の枠組みで扱っている。これは、Benveniste が複合形・単純形の別なくすべての動詞形を同じ枠組みで処理しているのとは大きく異なる点である。このように Lamiquiz の解釈は Benveniste の *histoire/discours* という概念を利用しようとしたのにも拘らず、結果的には Benveniste の枠組みの意図したものとは随分違ったものになってしまったと思われる。その原因は結局 Benveniste がその発想を得たフランス語動詞の時制体系とスペイン語の時制体系そのものが異なっていることにあると言えるだろう。

- 5) Alarcos (1975:125) ではこの表の横に複合形の表が掲載されているが、複合形は本稿が対象とする問題とは直接関係しないので省いた。
- 6) 後述するように、アスペクト対立の弁別特徴についてはいろいろの主張があり、ここで挙げた Alarcos の弁別特徴[±終結性(*término*)]はそのうちのひとつにすぎない。また、諸アスペクト説の中には *amé/amaba/he amado* のように現在完了形を加えた三項対立を主張するものもある。この時、*amé* は *aspecto puntual*, *amaba* は *aspecto durativo*, *he amado* は *aspecto perfectivo* を示すとされている。Cfr. Szertics (1974) p.18 さらに、[±完了性(*perfectivo*)]という弁別特徴は立てるが、この対立に直接関与するのは *amaba* と *he amado* とし(この時、*amaba* は無標項、*he amado* は有標項となる) *amé* はこの対立には関与しないものとして別扱いにしたものもある。2章で触れる RAE (1917) の態度はその典型と言えるだろう。
- 7) 時制説とアスペクト説それぞれがその根拠とする用例を比較してみると面白いことに気付く。すなわち、時制説は専ら、主文と従文からなる複文を用例として引き合いに出すのに対し、アスペクト説は単文しか扱わないという点である。*amé/amaba* のどちらも、単文・複文の別なく、また、主文・従文の別なく出現する点を考慮するならば、このように引用される形式に一定の制限が見られるのは、その説明の有効範囲自体に制限があるのではないかという疑問を抱かせる。*amé/amaba* の機能を解明する説は何であれまず第一にその実態を網羅的に説明するものでなければならないだろう。
- 8) RAE (1771) から RAE (1870) に見られる大きな特徴は *pretérito perfecto* が *amé* だけを示すのではなく、複合完了形である *he amado*、あるいは、場合によっては *hube amado* をも包含したものであったことである。その結果、RAE の関心は *amé* と *amaba* の機能的違いに対してよりも、*amé* と *he amado* の違いに対して向けられるようになり、両形式の機能的違いを説明した名称が *pretérito perfecto* の下位分類として用いられ、それは版によって異なることがあった。*amé/he amado* の名称の変化は次の通りである。
RAE (1771) *amé/hube amado* (*pretérito perfecto remoto*)
 he amado (*pretérito perfecto próximo*)
RAE (1796) *amé* (*pretérito perfecto remoto*)
 he amado (*pretérito perfecto próximo*)
RAE (1854, 1870) *amé* (*pretérito perfecto simple*)
 he amado (*pretérito perfecto compuesto*)
- 9) Cfr. 西川 (1988) p. 95, p. 96, p. 106, p. 120
- 10) Cfr. 西川 (1986) pp. 63-65
- 11) Cfr. Alarcos (1949) pp. 78-79, 82-84 ただし、Alarcos (1975) では *aspecto sintagmático*, *aspecto flexional* という用語は消え、*aspecto* という語だけがただ *amé/ama-*

ba の機能的差異を示すものとして残った。そして、Alarcos(1949)で aspecto sintagmático という語で説明された動詞単純形と複合形の違いは Alarcos(1975)では、anterioridad という語で説明されることになった。Cfr. Alarcos(1975) p.124

- 12) Alarcos(1949)の中で、弁別特徴[±delimitativo]に関する対立と捉えられていた aspecto sintagmático の違い (いわゆる単純形と複合形の違い) は、Alarcos(1975)では [±anterior]を弁別特徴とする anterioridad の違いと捉えられている。Cfr. Ibid. p. 127

13) Cfr. 三好(1988) p.125

14) Cfr. Gili Gaya(1961) pp.147-150

15) Cfr. Bull(1968) p.23

16) Cfr. Ibid. p.14, p.23 この時、E は動詞の語幹によって表わされる事態を示し、V はある axis of orientation における観察の定まった方向(vector)を示す。

17) amé に対する Retro-perfect という名称もここから生じたと考えられる。

18) Bull はこの RP に方向づけられない amé の機能を nonsystemic なものと見做している。また、この機能によって amé は he amado の潜在的自由変異になるとも述べている。Cfr. Ibid. p.95 因みに、Bull が nonsystemic と見做した例文とそれに付された説明を挙げてみると以下ようになる。

“ A noncyclic event which continues for some time is terminated before PP.
That the aspect is terminative is indicated by context and very frequent use of adverbs which delimit or measure:

Por medio siglo creció y floreció la república cristiana, extendiéndose hasta la costa occidental del río Uruguay.” (Ibid:96)

“ A series of events is terminated before PP.

Cien veces dijo que no quería ver más indios.

Cada día vio aumentar su pobreza y su postergación. ” (Ibid.:97)

“ A single event is perfected before PP but is not oriented to RP.

¡ Ah ! ¿ Lo trajo ?

Ese joven que salió es el nuevo inquilino.” (Ibid.:97)

“ The event is recalled at PP but is perfected before RP.

Y entonces advirtió lo que el mundo de gentes le impidió semanas antes notar del todo.” (Ibid.:98)

19) Bull が amaba を amo の backshift と見做すことができる理由として、両形式が同じ imperfective aspect を持っている点も看過できないだろう。

20) Cfr. Hernández Alonso (1984) p.367

21) state のグループには属性、所有、存在、思考などの不変の状態を示す動詞が属し、activity のグループにはあるプロセスから成る物理的あるいは精神的活動の動詞が属す。また、accomplishment のグループにはあるプロセスを経て何らかの結果・変化が生じることを示す動詞が属し、achievement には瞬間的に何らかの変化が生じることを示す動詞が属す。ある動詞がどのグループに属すかは特定の統語的テスト(progressive form が可能か、for an hour/in an hour と共起可能かなど) によって決定される。

22) 例えば Alarcos の挙げた例文 “Fernando III fue rey de Castilla y León” のように動詞句の表わす事態の終結がまず第一義の意味として感じ取られる場合があるが、この ser の amé も常に終結を表わすわけではない。

- 23) escribir una carta の表わす事態は一通の手紙を書き終えた時点で自然に終結したことになる。
- 24) 「amé はある動詞(句)の表わす事態の過去における生起を示す」という言述は Gili Gayaの「amé はある動詞(句)の完了を示す」という言述と類似したものと考えられる。しかし、完了という語は amé だけでなく he amado の機能をも表わしうるので本稿では用いない。
- 25) これは三好(1987)の指摘による。Cfr. 三好(1987) p.125
- 26) この例文の問題は ser の後に niño, pequeño といった幼少を示す語があると amaba しか使えないという点にある。もし、逆に、ser の成人・成長を示す語がくる場合には amé が用いられる。Cuando fui mayor de edad, pude ir sola de compras.

参 考 文 献

- Alarcos Llorach, E. (1949): {Sobre la estructura del verbo español}, *Estudios de gramática funcional del español*, 3ªed. 2ªreimpresión(1984), pp.50-89, Gredos Madrid
- (1975): {Otra vez sobre el sistema verbal español}, *Estudios de gramática funcional del español*, 3ªed. 2ªreimpresión(1984), pp.122-147, Gredos, Madrid
- Bull, W.E. (1968): *Time, tense and the verb. A study in theoretical linguistics with particular attention to Spanish*, University of California Press, Berkly
- 出口厚実(1977): 「基底時制と表層時制」, *Estudios Hispánicos* 4, pp.15-28
- Gili Gaya, S. (1961): *Curso superior de sintaxis española*, 12ªed. (1979), Bibliograf S.A. Barcelona
- Hernández Alonso, C. (1984): *Gramática funcional del español*, Gredos, Madrid
- Lamíquiz, V. (1982): *El sistema verbal del español*, Madrid
- 三好準之助(1987): 「現代スペイン語の動詞形式 CANTABA」, 『京都産業大学国際言語科学研究所所報』8, pp.113-150
- 西川 喬(1986a): 「20世紀の Real Academia Española における時制論 [I]」, 『神戸外大論叢』36-6, pp.53-73
- (1986b): 「20世紀の Real Academia Española における時制論 [II]」, 『神戸外大論叢』37-1~3, pp.207-227
- (1988): 『スペイン語時制研究史』 神戸市立外国語大学外国語研究所
- Porto Dapena, J.A. (1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Arco/Libros S.A., Madrid
- Real Academia Española(1973): *Esbozo de una nueva gramática de la lengua española*, Espasa-Calpa, Madrid
- Rojó, G. (1974): {la temporalidad verbal en español}, *Verba* 1, pp.68-149, Universidade de Santiago de Compostela
- Smith, C.S. (1991): *The parameter of aspect*, Studies in linguistics and Philosophy Vol.43, Kluwer Academic Publishers
- Szertics, J. (1974): *Tiempo y verbo en el romancero viejo*, Gredos, Madrid
- 山村ひろみ(1994): 「複文における indefinido と imperfecto—過去の主動詞に従属した名詞節における実態と考察」, *Hispanica* 38, pp.120-135